

■H31.02.01 市長定例記者会見内容

日時 平成31年2月1日（金）午後2時～3時15分

場所 庁議室

出席 市長、危機管理監、企画部長、地域創生部長、企画調整課長、交流観光課長、市長公室長

酒田記者クラブ 5社（山形新聞、荘内日報、読売新聞、朝日新聞、河北新報）
その他1社（コミュニティ新聞）

■市長発表内容

【酒田市と友好都市・岐阜県海津市との「災害時相互援助に関する協定書」の締結について】

本市と友好都市である岐阜県海津市との間で「災害時相互援助に関する協定」を締結することが決定し、2月13日午後1時より岐阜県海津市において調印式を開催する。

本市と岐阜県海津市は、当時、岐阜県平田町と旧平田町が同じ名称の縁から、昭和62年平田町議員が岐阜県平田町を訪問したことをきっかけとして交流が深まり、平成7年11月2日に友好町の盟約を締結。その後、小学生同士がお互いの町を訪問したり、特産品や名物を紹介しあったり人の交流や物産などで友好の絆を深め、市町村合併により互いに海津市、酒田市となった今日でも、交流は続いている。

近年、大規模な災害が全国各地で頻発する中であって、地理的に距離が大きく離れ、同時に被災する可能性が低い両市においては、災害時の食料、生活必需品などの救援物資や、職員の応援派遣など、災害の復旧復興にむけたさまざまな援助が相互に期待できるものと考えている。

【駐日ポーランド共和国大使が黒森歌舞伎観劇のために酒田市を訪問について】

2月17日、駐日ポーランド共和国大使ヤツィク・イズィドルチク氏が今年の11月にポーランドで公演を行う黒森歌舞伎を観劇のために酒田市を訪問する。

昨年12月にポーランドでの公演への協力依頼に私と黒森歌舞伎ポーランド公演実行委員会の五十嵐副委員長が大使を訪ねた際に2月に行われる黒森歌舞伎正月公演へ招待した。

1月22日に大使より黒森歌舞伎を観劇のために酒田市を訪問したいとの返事が届いた。特に大使は雪の中で上演される黒森歌舞伎の公演を見ることを大変楽しみにしているとのこと。

今回の大使の訪問を通じて、11月のポーランド公演への協力と今後の酒田市とポー

ランドとの交流につながればと期待している。

【質疑応答】

記者／相互援助の件で。現状海津市と酒田市で友好都市か姉妹都市の協定は結んでいるか。

市長／市同士としては結んでいない。旧町同士では盟約を締結している。合併した後は交流という形で引き継がれてはいるが、あえて市同士で締結する必要はないと考えている。交流を引き継ぐ形でこれからも展開して行く。災害協定を結ぶことが裏づけになると思っている。

記者／現状では行政同士ではなく市民レベルでの交流を続けてきたという認識でいいか。

危機管理監／小学生同士、隔年で行き来している。平田産業まつりでは物産の販売などを行っている。これも隔年でお互い行き来している。

市長／行政の面での交流もなくはない。市民レベルの交流や経済交流をもっと深めようという声があった。海津市には造り酒屋がない。こちらではお酒を売り込みたいと思っている。議長と副市長には話をした。

今回の協定を弾みに交流事業を広げて、これからの展開に期待している。

【懇談（幹事社）山形新聞社】

記者／先日の安全祈願祭でいよいよ正式に駅前再開発に着工となったわけだが、改めて事業に対する市長の考えを聞きたい。

市長／長い間、駅前開発は懸案だった。まずは着工まで漕ぎ付けたことは、いよいよ十数年来の懸案事項に解決のめどが立ったのかなと思っている。少しは責任が果たせたのかなと考えている。ただ上物は資金投入で作れるが、問題は中に我々がどんな仕掛けをしていくか、ライブラリーセンターや観光情報センター、マンションホテルなどがしっかり機能して、そこが賑わいの中心になるようにどうやってもっていくかが課題。箱物だけに終わらせないように仕掛け作りをしないといけない。もっと知恵を出し、汗をかいていかなければならないと、決意を新たにしたところである。

駅前は大プロジェクトで、同時に産業会館の市街地再開発事業もあり、市が財政負担する部分がかなりある。今後の財政運営もしっかり手綱を引き締めていかないといけない。財政破綻しては元も子もない。ある意味、緊張感をもった安全祈願祭だった。

記者／市街地再開発も間もなくか。財政運営の厳しさもあると思うが、駅前と市役所周辺も含めた中心市街地の2つを賑わい作りにどのように生かしていくと考えているか。
市長／市街地の考え方は駅前、山居倉庫周辺、中町周辺そして港を含めた日和山周辺、この4つの核を賑わい作りに据えているが、再開発事業なので新しい施設が中心になってくる。産業会館は産業界にとっての拠点となる施設で、駅前は酒田の玄関口であり、

ホテルなども建つ。都市機能を高めるための再開発として期待している。

一方、山居倉庫や日和山周辺は観光拠点としての機能をしっかりとつくりあげていきたい。機能は違うが市街地に人を呼び込む仕掛けとして両方とも不可欠な機能を持ったエリアだと思っているので。引き続き実現に向けて取り組んでいきたい。

記者／観光拠点としての山居倉庫周辺の方向性について伺いたい。

市長／山居倉庫を史跡にすると、施設そのものを使った集客、駐車場確保など難しくなる。文化財になるわけなので。しかし山居倉庫は酒田の観光で一番の人気スポットでもあるので、集客をするための駐車場の確保やお土産を買ってもらふ施設が必要になってくる。その機能を旧商業高等学校跡地に集積したい。財政的な事情もあり、全部公共負担で行うのは現実的に難しい。民間企業に入ってもらい、そういった機能を作り上げてもらいたい。構想の具体化には内部で検討しているが、なるべく早い時期に具体的なプランを組み立て、着手できればと考えている。

優先順位からいうと、まずは日和山周辺。旧小幡に着手をしながら、その次の段階として山居周辺にもプランニングを進めていきたい。

記者／2、3年後山居倉庫が史跡認定を受けたタイミングくらいに、旧商業高等学校跡地の利活用を考えているのか。

市長／計画を早く作って実際に整備に着手することもできるが、史跡認定されれば人が集まる環境になるわけだが、そのときに駐車場が無いということにならないように、何とかしたい気持ちはあるが、県道の整備もしばらくかかるので、少し時間を掛けていくしかないと思ってる。山居倉庫が史跡になったときを1つの節目として、計画ぐらいはでかしておきたいと思っている。

記者／駅再開発の酒田市負担分は増えることはあるのか。総事業費が上がっているが、それに伴って市街地開発事業の補助金は増えるのか。

市長／補助対象となるエリアが動くことはあると思うが、市が負担するのは補助金としては約18億5000万ぐらい。これは交付金が満額来るものとして。来るとは限らない。満額こなければ市の負担は下がる(国と同額出すので)。その分事業主体に負担が行く。

記者／市の持ち出しは補助金と買取り価格を足した額が市の持ち出しと考えていいか。

市長／そのとおり。一番危惧しているのは駅前と産業会館の2つ抱えていること。交付金が少なくなると市の補助金も圧縮されて持ち出しは少なくなるが、事業者が負担することになるので、事業の実施がきつくなるということがあると思う。

企画部長／事業者が事業の利益を削ってでも金額を変えないのか、入居者や購入者に値段の交渉をするのかはわからない。

市長／酒田市でどうにかしてくれということになるかもしれない。それに対し、我々がどう答えるかは、交付金の付き方によっては大きな課題になる。

国に補助金を満額つけてくれるよう要望活動してきた。事業成功のためにはこれからも国に強くお願いしていきたい。

記者／酒田のラーメンについて。市ではどんな事業をしているのか。市長として酒田のラーメンどう捉えているか伺いたい。

市長／酒田のラーメンを考える会が「酒田のラーメン」という言葉を使い始めたのがきっかけ。酒田におけるラーメンづくりという伝統を、街の魅力発信の材料にしていこうという思いがある。ラーメンづくりの風土が観光資源になりうるのではないかと考えている。酒田のラーメンを考える会がExpoをやったり、市外の人から酒田のラーメンは素朴でおいしいねといった声を聞いたりしたので、それを売り出していこうと。ラーメン屋は自分達で商売をしているので、あまり我々が全面的に税金を投入して何かをするというのは、仕掛けにくい話である。舞娘さんもしかり、民間サイドに点在しているさまざまな素材を観光資源としてアピールをする、チラシやポスターに使い、酒田の魅力の発信材料の一つとして考えている。

ラーメンエキスポは酒田のラーメンを発信する大きなきっかけとなったが、なによりもラーメン業界の皆さんが元気になって自分達の仕事に意欲を持ってもらえたことが一番大きかった。これ以上大きな仕掛けは行政としてはあまり考えていない。祭りやDCキャンペーンなど人を呼び込める素材として使いたい。業界の活性化につながってもらえば我々としてはありがたいし、一緒にやっっていこうという捉え方である。

人を呼び込めればいい。

記者／ラーメン業者が県外に店舗を構えるなど、元気があるが市長から見てどうか。
市長／元気であることはうれしく思う。酒田でラーメン店を構えている人たちが意欲的に商売を展開できる、そういう下支えをしていきたい。市、街そのものが応援していると思ってもらえれば。そういうことを狙いにしたい。若い人たちが開催するロックコンサートなど声がかかれば行く。自治体が自分達の活動を後押ししてくれていると感じてもらっただけで意欲が違ってくる。

酒田に何が一番必要かという、行政から引っ張り上げられるのではなく、自分たちから湧き上がるエネルギーがもっとあると、街全体が活気づく。そういった風土ができればいい。商売上だけでなく、文化芸術にも同じことが言える。もっといえば、まちづくりといった行政に対する市民の意識も、湧き上がるようなエネルギーが出てくるといい。関係ない話になるかもしれないが、県議選に定員以上の人が出るのもいいことだと思う。若い人が投票にたくさん行くなど、行政や政治に対する関心もつ風土が大事ではないかと感じる。

記者／市長から見て、酒田のラーメンの風土、文化というのはどんなところか。

市長／小さい時から食べているラーメンは、体に染み込んでいるもの。県外の有名な地域のラーメンを食べても正直、あまりうまいと感じない。自分達のラーメンの基準はやはり酒田のラーメンだから。その基準で照らし合わせたときにどうも違う。他の地域の人からすれば酒田のラーメンもそうになってしまうのかもしれないが。市長として地元で

昔から食べられているものにてこ入れをして、地元を知ってもらいたいという思いでやっている。哲学があってやっているわけではない。

記者／南陽市にはラーメン課がある。ラーメンカードでポイントが貯まり特典がもらえるものも評判だったようだが、酒田市で商工、観光部門に課など立ち上げることは考えていないか。

市長／そこまでは考えていない。同じ県内で、二番煎じになってしまう。酒田は酒田ならではのラーメン業界の振興を図っていければいいと考えている。ラーメン業界全体が元気になる仕掛け提案があれば、市として乗っていてもいい。人を呼び込む一つの素材になればいい。この地域にお金を落とす仕掛けが地域振興の押さえどころだと思っている。ラーメンが有名になってきたとすれば、酒田のラーメンを考える会と意見交換してみてもいいと考えている。

以上